

## 水泳集中授業における学生の泳力と 授業評価に関する一考察

大山 康彦・鋤柄 純忠・細越 淳二

### 1. 緒 言

1991年7月の大学設置基準の大綱化以後、各大学の教育改革はカリキュラム改訂および再編成を中心に急速に展開し行われた。特に大学教育の改善に向けて、自己点検評価制度が導入されるなど、具体的にはシラバスに基づいた授業展開、授業評価等に関連したカリキュラムの編成などが求められた。

このような情勢を受け、各大学ではシラバスは授業実践を実効あるものにする上で重要であるとの認識に立ち、学生による授業評価とも合わせて各大学独自の取り組みがなされてきている。学生による授業評価を一つの視点として、その授業がシラバスに書かれていたことと比較しての授業評価を評価項目に入れている大学が多いことも報告されている<sup>1)</sup>。

筆者らはこれまで大学体育における授業研究に関して、主に水泳集中授業について受講学生の水泳運動能力の習得過程の分析<sup>2)</sup>、および集中授業期間における水泳運動能力の開発に観点を置いた分析<sup>3)</sup>を継続的に実施してきた。とりわけ大学生のしかも教職志望の学生の水泳運動能力の個人差がこれまでの調査から極めて大きいという実態を受けて、大綱化以前よりシラバスに基づいた独自の授業展開を試みていたが、特に大学改革以後は、シラバス作成と授業評価を連携させて教育方法の改善を意図して行っている。

一方2002年度から完全実施される新学習指導要領<sup>4)</sup>では、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことを基本理念としており、特に「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康と体力」を「生きる力」として教育される時期を迎える。すでに小・中・高における体育授業でも、一斉指導型ではない授業スタイルが研究され、新学習指導要領に基づいた授業が実践されている。

これまで水泳運動能力に関する先行研究はスポーツ科学領域を中心に広範囲になされているが、授業研究に関わる授業評価と関連させた実証的研究はほとんどなされていないのが現状である。

本研究は大学生の水泳運動能力と水泳集中授業終了直後に実施した学生による授業評価の2つの観点から、受講学生間にみられる水泳運動能力獲得の違いが授業評価にどのような差異が見られるかを検討し、大学体育における水泳授業の指導改善のための示唆を得ることを目的としている。

## 2. 研究方法

### (1) 対象

1997 年度から 2000 年度の 4 年間に水泳授業を受講した K 大学教職課程所属の 2 年次生大学生 346 名【内訳、男子：77 名 (22.25%)、女子：269 名 (77.75%)】。

### (2) 調査方法

質問紙法によるアンケート調査を用いた。設問項目は下記資料に示すように「技能」・「知識」・「意識」・「健康・体力」・「体育授業」・「指導者」の 6 つのカテゴリーより計 30 項目を設定し、「全くそう思う」から「全く思わない」までの 5 段階評価で答えさせた。

#### (調査用紙)

##### 水泳集中授業に関する調査

記入日 年 月 日

この調査は授業の成果を統計的に把握するための資料とするものです。みなさんの正直な考えを聞かせてください。

5	4	3	2	1
全くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない

以下の質問についてあてはまる番号に○をつけてください。

(1) 水泳運動能力が向上した。	5	4	3	2	1
(2) 水泳を科学的な視点で考え、泳ぎに関する知識を吸収できた。	5	4	3	2	1
(3) 指導のためには、教材研究が必要だと感じた。	5	4	3	2	1
(4) 体力的に余裕を感じながら受講できた。	5	4	3	2	1
(5) 授業を通して新しい友人ができた。	5	4	3	2	1
(6) 指導者から良いアドバイスが得られた。	5	4	3	2	1
(7) 指導者に質問できるようになった。	5	4	3	2	1
(8) 授業を通して自分に対する理解が深まった。	5	4	3	2	1
(9) 健康状態を意識しながら受講できた。	5	4	3	2	1
(10) 水泳を楽しめた。	5	4	3	2	1
(11) 受講ノートの作成が十分にできた。	5	4	3	2	1
(12) 各種泳法の技術が身に付いた。	5	4	3	2	1
(13) 自分の技術的問題点を発見できた。	5	4	3	2	1
(14) 水泳について人に説明できるようになった。	5	4	3	2	1
(15) 積極的姿勢で受講できた。	5	4	3	2	1
(16) 授業を通して体力が向上した。	5	4	3	2	1
(17) 体育に対する考え方に変化があった。	5	4	3	2	1
(18) 指導者とのコミュニケーションが十分とれた。	5	4	3	2	1
(19) 指導者は十分な知識を持っていた。	5	4	3	2	1
(20) 水泳の VTR は実技の参考になった。	5	4	3	2	1
(21) 授業を通して健康状態が改善された。	5	4	3	2	1
(22) 「泳ぐ」ことに自信を持てるようになった。	5	4	3	2	1
(23) 水泳に関する専門書を読む必要性を感じた。	5	4	3	2	1
(24) 他人の泳ぎを見て、技術的問題点を見つけることができた。	5	4	3	2	1
(25) 技術的問題点を解決するための練習ができた。	5	4	3	2	1
(26) 蘇生法について、十分な知識が得られた。	5	4	3	2	1
(27) 今後も自主的な研鑽を積む必要性を感じた。	5	4	3	2	1
(28) 自分の身体への認識が変化した。	5	4	3	2	1
(29) この集中授業形態は成果が得られる方法だと思う。	5	4	3	2	1
(30) 指導者には十分な熱意があった。	5	4	3	2	1

ご協力ありがとうございました。

### (3) 分析方法

得られた資料は単純集計の後、各カテゴリーごとにまとめ、持続泳距離の伸び率を基準として上位群と下位群に対象を二分し、30 項目についての有意差検定 (t- 検定) を行った。なお、全体に占める男子学生の割合が低い (22.25%) ことの原因から男女を総括して統計処理を行った。

## 3. 結果と考察

### (1) 10 分間泳測定からみた水泳運動能力の変化

筆者らはすでに集中型の授業形態でも水泳運動能力の改善がなされることを継続的に 10 分間泳測定から明らかにしている<sup>3)</sup>。特に基礎的運動能力の中でも持続泳能力の開発が顕著に現れることも報告している。本研究対象学生についても統計からは同様の結果を得ており、持続泳平均で 46.61m の泳距離の伸びが認められている (表 1)。また、平均値を基準とした二群間の平均泳距離の値は 0.1% 水準で有意差が認められ、受講生の上位群と下位群における水泳運動能力において明らかな差があることを示している (表 2)。

### (2) 水泳運動能力と授業評価得点について

表 3 からは上位群と下位群における水泳運動能力は有意な差が認められるのに対して、授業評価全体の平均得点の比較からは、上位群 4.05 に対し、下位群 4.03 とほぼ同じ得点であることから、二群ともに水泳授業については総合的に高い評価をしていると言えよう。また、授業評価得点の平均 (4.04) を基準として、平均上位群の泳距離の伸びと下

表 1 10 分間泳の平均泳距離の推移 (単位: m)

授業はじめ	授業おわり	平均の伸び
305.18	351.79	46.61

(N = 346)

表 2 10 分間泳の伸びが平均 (46.61m) 以上と以下の者の比較

	平均下位	平均上位	t 検 定
伸びの平均 (m)	339.30	365.65	.0004 ***
人 数 (N)	182	164	

(\*\*\*: P < .001)

表 3 10 分間泳の伸びが平均 (46.61m) 以上と以下の者の授業評価得点の比較

	平均下位	平均上位	t 検 定
授業評価 (点)	4.03	4.05	NS
人 数 (N)	182	164	

表4 授業評価得点が平均（4.04点）以上と以下の者の10分間泳の伸びの比較

	平均下位	平均上位	t 検 定
伸びの平均 (m)	46.559	46.663	NS
人 数 (N)	177	169	

位群を比較した場合に、同様に有意差は得られなかった（表4）。このことは、泳力の優劣に関わらず、評価が平均して高いことを裏付けている。

表5は設問30項目についての分析結果である。6カテゴリーについての平均得点は、「指導者」の4.39が最も高く、次いで「技能」の4.32、以下「意識」：4.20、「体育授業」：3.93、「知識」：3.90、「健康・体力」：3.59の順であった。

30項目中、比較的高得点であった項目は、「指導者は十分な知識をもっていた。」：4.81、「指導者には十分な熱意があった。」：4.75、「各種泳法の技術が身に付いた。」：4.61、「指導者から良いアドバイスが得られた。」：4.57、「この集中授業形態は成果が得られる方法だと思う。」：4.42、「自分の技術的問題点を発見できた。」：4.40の6項目であった。この結果からは、「技能」と「指導者」に関わる項目について高く、特に指導者に対する評価と、受講生自身の運動能力の拡大についての評価に集中して高い傾向がみられた。このことから、全体的に水泳授業に対して好意的な態度がみられ、しかも授業の有効性についても高く評価しているといえよう。唯一、上位群と下位群に有意傾向がみられた「この集中授業は成果が得られる方法だと思う。」の項目では、上位群に比較的高い評価をしている傾向がみられた。すなわち比較的泳力が高い者ほど、授業評価を高くしている傾向にあるといえよう。

これに対して低得点であった項目は、「体力的に余裕を感じながら受講できた」：3.06、「授業を通して健康状態が改善された」：3.29、「水泳に関する専門書を読む必要性を感じた。」：3.41、「指導者とのコミュニケーションが十分にとれた。」：3.41、「指導者に質問できるようになった。」：3.48の5項目であった。いずれも授業に付随した項目であるが、「健康・体力」関連項目が特に低く、この結果からも受講学生の体力低下の実態が推察できよう。

全体的には上位群と下位群における評価得点の傾向は近似しており、泳力の優劣が評価にまで影響を及ぼしている傾向は認められなかった。

### (3) 受講後の提出レポートから見た授業評価

下記に列挙する感想文は、調査実施年度に該当する受講学生のレポートからの抜粋である。これらの断片的な文章からは、本研究調査で得られた全体平均4.04の評価ポイントを裏付けている具体的記述からは多くの成果があったことが推察できる。

#### 【技能に関する内容】

- ・「……スイミングで習った泳ぎは、自分が泳げるようになれば良いだけだったけど、

表5 水泳集中授業に関する調査 分析結果

項目	質 問 項 目	平均	平 均		有意差
	技 能	4.32	上位群	下位群	
1	水泳運動能力が向上した。	4.61	4.61	4.61	
12	各種泳法の技術が身についた。	4.25	4.22	4.27	
13	自分の技術的問題点を発見できた。	4.40	4.44	4.36	
24	他人の泳ぎを見て、技術的問題点を見つけることができた。	4.12	4.13	4.12	
25	技術的問題点を解決するための練習ができた。	4.22	4.22	4.21	
	知 識	3.90			
2	水泳を科学的な視点で考え、泳ぎに関する知識を吸収できた。	4.15	4.10	4.18	
7	指導者に質問できるようになった。	3.48	3.46	3.49	
14	水泳について人に説明できるようになった。	3.67	3.67	3.67	
20	水泳の VTR は実技の参考になった。	4.02	4.08	3.96	
26	蘇生法について、十分な知識が得られた。	4.19	4.16	4.22	
	意 識	4.20			
3	指導のためには、教材研究が必要だと感じた。	4.37	4.40	4.33	
8	授業を通して自分に対する理解が深まった。	3.90	3.88	3.91	
10	水泳を楽しめた。	4.36	4.36	4.36	
15	積極的姿勢で受講できた。	4.28	4.32	4.23	
22	「泳ぐ」ことに自信をもてるようになった。	4.08	4.10	4.06	
	健 康 ・ 体 力	3.59			
4	体力的に余裕を感じながら受講できた。	3.06	3.08	3.04	
9	健康状態を意識しながら受講できた。	3.94	3.98	3.90	
16	授業を通して体力が向上した。	3.96	3.97	3.94	
21	授業を通して健康状態が改善された。	3.29	3.35	3.22	
28	自分の身体への認識が変化した。	3.71	3.69	3.72	
	体 育 授 業	3.93			
5	授業を通して新しい友人ができた。	3.73	3.66	3.77	
11	受講ノートの作成が十分にできた。	3.90	3.86	3.94	
17	体育に対する考え方に変化があった。	3.77	3.81	3.73	
23	水泳に関する専門書を読む必要性を感じた。	3.41	3.45	3.36	
27	今後も自主的な研鑽を積む必要性を感じた。	4.33	4.34	4.31	
29	この集中授業形態は成果が得られる方法だと思う。	4.42	4.50	4.34	0.053 †
	指 導 者	4.39			
6	指導者から良いアドバイスが得られた。	4.57	4.59	4.54	
18	指導者とのコミュニケーションが十分にとれた。	3.41	3.33	3.47	
19	指導者は十分な知識をもっていた。	4.81	4.84	4.77	
30	指導者には十分な熱意があった。	4.75	4.76	4.74	
	総 合 平 均 点	4.04	4.05	4.03	

(N = 346)

- この実習での泳ぎは自分も泳げるようになり、しかも教えられる泳ぎだったと思う。」
- ・「実習前までは、無我夢中に泳いで、前に進むことだけを考えていましたが、この実習を通して、正しいストリームラインや手足の入水法による最小限の水の抵抗を考えながら泳ぐことが大切だと痛感しました。そして、水の抵抗の少ない正しい泳ぎ方は、「速く」「長く」「美しく」泳げることに繋がります。それを証明するかのように、1回目と2回目の10分間泳の距離には私が思った以上に差が出ており、しかも楽に泳げたことが不思議でなりません。」
  - ・「……私の泳ぎというものを変えたのが「ストリームラインを保つ」ということだった。これは泳ぎ全てに言えることである。……私はこれを知ったことで、よりスムーズに、より楽に泳ぐことができるようになったと感じている。水泳の技能一つ一つを、これを中心にしっかりと見直していきたいと思う。……知識を学び、それを自分のものとして表現するという事は容易ではなかった。しかし、そのおかげで、この実習が私の中でしっかりと実を結んだと確信している。」
  - ・「この20年間25m以上進むことのなかった（進もうともしなかった）私が、たった数回の実習を受けただけで50m泳ぐことに何の抵抗もなくなった上に、10分間泳ぎ続けることに対してもそれほど抵抗はなくなってしまったのです。ほんの数ヶ月の自分からは本当に想像出来ません。」
  - ・「あんなに苦しくて長かった25Mが短いとまで思えるようになった。私の中で一番の大きな変化は呼吸だった。正しい呼吸をすることができるようになったので、無理せず25Mを泳げるようになったのだと思う。また、未知の世界だった50Mも完泳することができた。本当に信じられないことだ。正しい泳法と呼吸を身につけたことで、このような大きな成果を得たことに驚いた。最初は嫌だった水泳も、終わってみればとても楽しかったし、自分のためにもよい経験だった。」
  - ・「今まで、水の特性のことを考えながら泳いだことはなく、そういうようなことを知らずに泳いでいたなんて、とても無駄な動きをしていたんだな——と思いました。特にストリームラインを保つことが、私の泳ぎを変えた一番の要因だと思います。ストリームラインを保つことで、水に対する抵抗が小さくなり、容易に進むことができるようになるのだと思います。」

#### 【知識に関する内容】

- ・「水泳実習といっても、広い視野でみると、とても奥が深い事に気が付く。プールの壁にいる生徒の様子で授業全体の良し悪しがわかり、水の動きや水圧を感じる事は、感性の問題にまで通じる。そして、最終日、先生から教えて頂いた「三つのポイント」を忘れずにいたい。水泳は、①水難事故などの緊急時や、普段の健康に対して自己保全能力を高める。②地域の施設などを利用し、生涯を通じて続ける事のできるスポーツである。③水というものを通し、環境について、考える事ができる。」
- ・「水慣れのためのプログラムとして水中ウォーキングや水中での相手の動きを見ることが、メリーゴーランドなどの遊びっぽい動きを取り入れて、水の浮力・抵抗・水圧を体で感じることから始まった。このことによって、私の中での水に対するなじみにく

- さや親しみにくさ・恐怖心が少しずつなくなり、「バタフライ」・「平泳ぎ」・「クロール」・「背泳ぎ」の泳法につながっていったと思う。」
- ・「今まで唯一きちんと泳げていると思っていたクロールが、間違いだらけであることを知らされました。特に、エントリー・プルといった手の使い方ができていないというより、わかっていませんでした。このことは他の平泳ぎや背泳ぎでも同じで、浮いて進むことが出来ていても、動作の一つ一つが持っている意味が何も分かっていませんでした。背泳ぎのプルは、ただ回すのではなく、横で投げるようにするのだということや、平泳ぎでは、手と足の動きは別々だったことなど、それまでは思いもよらなかった泳ぎ方を知りました。」
  - ・「実習1日目から、バタフライを練習することにも疑問を抱いていた私だったが、実際に練習を進めていく中で、バタフライから始めた理由を身を持って知ることができた全ての泳ぎの基本となり得るドルフィンキック、そして呼吸のリズムを自然と身に付けられるエレメンタリーバタフライは、私にそれぞれの泳ぎがまったく別のものではなく、それぞれに共通する部分を持っているのだということを教えてくれたのである。」
  - ・「この実習は、人の泳ぎを見て、悪いところ良いところもよく見られるようになったし、それから何よりもためになったのは、初心に戻り、泳げない人の気持ちを知り、どうしたら泳げるようになるのか、初心者はどういうことでつまづくのか（例えば、壁を蹴ってストリーラインを作るのははじめは難しい）。など改めて考えることができた。」
  - ・「私は今アルバイトで幼稚園から小1くらの子供に、スイミングスクールで水慣れや、キック（ビート板）を習得させている、今までは技術を早く覚えさせようと必死だったが、現在、指導の目標はストリームラインをしっかりと保てるようにすることと、何よりも「水泳の楽しさ」を教えることである。このような考えを持って指導できるようになってから、子供たちの表情が何となく生き生き見えた気がした。この実習を通して自分が向上したと実感できたと思う。先生方、そして私に指導したり励まし合った友達、ありがとう。」

#### 【意識に関する内容】

- ・「私にとって、“体育”という科目は、苦手意識、劣等意識を感じるものであった。その中の“水泳”にも良い印象はなかったように思う。でも、この実習を終えて、“泳ぐことは楽しい”という印象に変わった。特に私は“10分間泳”に楽しみを感じられた。水の中で無心に泳ぎ続ける——とても気持ちのよいものだった。子どもにとって、苦手意識を持っている教科（教材）を興味のもてるように、いろいろな角度からみえるように手助けできる先生こそ魅力的だと思った。」
- ・「『泳げた！』と思った瞬間は突然訪れ、同時に自分自身の可能性を少し信じられるようになった。言葉では上手く言い表せないが、この水泳実習を機に、自分が一回り大きくなった様な気がした。これからは堂々と「やればできる」と宣言できる。この経験を今後、生かしていきたいと思う。」

- ・「……私が教師になった時は、この実習のように、「水泳の楽しさ」、「泳げるようになった時の感動」を生徒にも味わってもらいたいし、私のように泳げなかった人も泳げるようになるんだということを伝え、自信をもたせてあげたいと思います。この実習は教師を目指す私にとって、本当にとっても大きなものです。これからも、この感動や身につけた事を忘れないように水泳を続けていきたいと思います。」
- ・「今回、この授業をうけてみて、水泳というもののとらえ方が、自分の中で大きく変わった事に気づきました。私は、水泳はとりあえず、泳げるか、泳げないかの世界であると思っていましたが、水泳をなぜ今、学ぶという所に着目した時に、先生がおっしゃっていた、自分の身を守るという事、生涯スポーツとしての水泳、そして環境問題をみるためのフィルターとなる水泳という3点、そして、私たちは子供たちに、水泳の楽しさや大切さを伝えていかなければならないという事など、広い視野で水泳をとらえる事ができました。」
- ・「泳げない」と言っていた友人たちが、先生方の指導後、どんどん泳ぐことができるようになっていた姿から、「頑張れば自分も出来る」という思いが生じ、自分の中の意識の変化が、自分自身で感じられるようになっていった。ただ「～で～m泳げる」ということではなくて、「なぜ今水泳を学ぶのか」「いかに泳ぐか」「いかに泳ぎを教えるか」等々、根本的なことを考え、認識し、意識しながら泳ぐことの重要性を実感したのだった。」
- ・「自主練習を始めて10日ぐらいたった日、自分の体が水の中でスーッと進んでいることにふと気付いた、それはまだ普通の人に比べたらゆっくりな速度だったかもしれないが、あの時のあの気持ち良さや泳げる喜びは、これからも一生忘れないだろう。本当にうれしかった。」
- ・「今こうして泳げるようになってみると泳げなかったのではなくて、楽しさを知らなかったため・努力して泳げるようになろうと思わず泳がなかったのだと思う。小・中学校の時は先生がプールに入らないので「プール」の楽しさが伝わってこなかった。今回先生方があの寒い気候の中、まったく冷たくなさそうに楽しそうに入っていたのを見てそう思った。この実習を通して、水泳の実力が向上したことはもちろん、楽しさを教える難しさ、大切さみたいなものを学んだような気がする。考えることができた。」
- ・「自主練習期間に6回もプールに通い、無我夢中で練習した。一緒に行った友達も自分のことで大変なのに一生懸命教えてくれて、改めて友達の温かさ、存在の大きさに気付かされた。その練習のかいあって、クロールは前より形よく泳げるようになり、25mもいくようになった。」
- ・「いざ始まると私のように泳げない人が以外といることに驚いた。私だけ特別ではない、みんな努力している。ここでは恥とかかまっていられないんだ、と意識が変わった。泳法も本当に初歩の初歩から、手の形、水中でのかき方、体を浮かせること……などなど今まで疑問に思っていた。できて当然のように進められてきたことまで根気よく教えて頂けて驚いた。これまで私が数回ではあるが、うけてきた水泳指導は一体何だったんだと思った。今回先生方は、本当に1人1人によく細かい注意をなさって

いた。私はかなり下手なのが際だっていたのか最初の頃はよく声をかけて頂いた。そうすると、ああ、自分は一人ではない。ちゃんと見ていてくれる人がいる。しっかりやらねばと心強かった。」

- ・「先生が「自主練習を行うことで、毎年皆かなり上手になってます。」とおっしゃったのを聞いたときには、正直言って不安でした。「自主練習では指導してくださる先生がいないのに、本当に上達するのだろうか——」と思ったのです。でも友達と実際に自主練習をしているうちに、「ここでは、ある泳ぎでは友達が私の先生の役割を果たし、またある泳ぎでは、私が友達の先生役を果たしているのだ。」ということに気づきました。そして今になって考えてみると、自分の水泳運動能力が向上したのは、自主練習期間中です。」
- ・「私が小学校の頃、水泳が大の苦手だった。それは今でも相変わらずである。でも、(教育実習に行って)あの子達にこんな思いをさせてはいけないと思った、おそらく40人いる子どもたちの中には、私と同じように「水泳キライ」と思っている子が少なくとも1人はいることだろう。せめて、「水はこわくない」と思えるくらいにしてあげたいと思った。それには私自身が変わらなければならない。」
- ・「自主練習期間に身につけることが出来たことを、12月の実習の時に先生にほめられたことが嬉しくて、「また頑張ろう」と思ったり、予想以上の力がでるなんて驚きだった。ほめてくれると言うことは、私のことを見てくれて自分を見ていてくれる人がいると言うことがこんなにも嬉しいことなんだと思った。この水泳は私にとって本当にプラスになった。」
- ・「私は実習を終えてあることを思い出した。私は水泳が好きだったということだ。正直言って人の勝ち負けを争うのはあまり好きではない。しかしこれまで学校のプールの授業は順位を争う速泳ばかり。学校のプールの授業は次第に魅力の薄いものとなっていった。ところがこの授業はどうだろう。他人より速く泳ぐのが目的ではなく、その人自身が泳ぐことが目的とされている。昔を思い出した。少しでも上手になってやろうという気持ち。こんなに楽しい水泳は久しぶりだった。」
- ・「私は小学校の頃スイミングスクールに通っていたので泳ぐ事は出来た。(中略)今までは教えられる側にしかなかったが、自主練習をしに行って、友人にどう説明すればよいのか、どうすれば泳げるようになるのか、等、いろいろ考えさせられた。改めて自分が泳げることと教えることは違う、ということを認識した。しかし、その中で私の指導によって泳げるようになったと言われた時は大きな感銘を受けた。もしかしたら先生方もそういう気持ちで水泳実習等を行っているのではないかと思った。そう考えると、自分がもっと多くの人たちを指導するのが楽しみな反面、教材研究はとても大切だと思った。」
- ・「水泳は実習前と同様、まだ苦手である。でも嫌いではなくなった。それは今回の実習で水泳の楽しさを得られたからだと思う。教師になって、教えることがあるときに、水泳が苦手だったり嫌いな子を、少しでも水泳を好きになってもらえるように教えることが出来ればいいな、と思った。」
- ・「スポーツは、何でも幼い頃に覚えないと手遅れだと思っていた私にとって、大学生

になって泳げるようになったことは大きな自信となった。ひたむきな努力が実を結ぶことを強く感じた。この経験を無駄にしないためにも、生涯スポーツとして、水泳を続けていきたい。」

- ・「実習を行う前は、ただ泳ぐだけだろうなと思っていた。しかし1回目の授業で、それが見事に崩れた。水泳の大切さ、そして各種の泳ぎ方、水泳の楽しさ、どうして今になってそんなことに気づくのか、もっと早く私は知りたかった。もし教師になったら「水泳の楽しさ」を教えたいと思いました。速く泳ぐことより水泳の楽しさ、大切さ、どうして水泳というものを習うのかななどを教えたいと思いました。」
- ・「先生の説明を聞いていて「本当に泳ぎ方を教えられる人は、悪い見本も泳いで見せられる」という言葉がすごく印象に残りました。教える立場になれば、泳げない人の立場になって、なぜ泳げないのか、なぜ沈んでしまうのかなどを考えて、実際に自分でやってみて、そこからどう教えていくかを考え、よりわかりやすく教えなければいけないことが重要だということを知りました。」
- ・「教えることにも創意工夫が必要だと思った。これが教員になるときにとても役立つはずだと思った。特にエレメンタリーは、初めてやったので自分のためになり、泳ぐ姿勢などが正されたように思う。ばた足、ドルフィンキック、カエル足、それぞれの泳ぎの手の動き一つ一つがエレメンタリーにつながり、その指導のわかりやすさがとても勉強になった。」
- ・「私は「水泳実習が終わっても、水から離れてはいけない」という先生のことばが印象に残った。確かに実習が終わればプールに入る機会はほぼなくなってしまう、しかし、身につけた技術も使わなければ錆びついてしまう。継続することの中にこそ、技術や経験は生きていくのだ。このことはすべての行動に共通する。私は水泳実習を通して、大切なことを思い出すことができた。」

#### 【体育授業に関する内容】

- ・「いざ実習を受けてみると、水の持つ性質の理解に始まり、水泳上でいかにそれを利用するかを勉強する事により水泳の本質を理解できた。なにより段階を設定し、除々に泳ぎを泳法の形に近づけて行く指導法にはとても共感できたし、結果も出せたと思う。かつ、習得を目的とした自己練習を義務づけた点がすばらしかった。(中略)実習終了の際には、解放感よりも目的達成による充実感のほうが強く感じた。」
- ・「正直言って9月の実習終了時点では自信を持つことは出来なかった。しかし先生方の指導は熱心で、‘ああ、これが真の水泳の授業だ’と感じた。先生方全員が水着に着替えてプールサイドから見守ってくれたことは、泳いでいる方からすればすごく安心するものであった。自分が今まで指導されてきた小、中、高校ではこのような光景を目にすることはなかった。」
- ・「この授業の成果として3点あげることができる。1つ目はバス車内での視聴覚教材である。ある程度の知識を身につけておくと、授業に入りやすいと思った。2つ目は集中授業だったことだ。集中的に授業を行うことによって、前日の泳ぎを次の泳ぎに生かすことができた。3つ目は、先生方の指導方法である。まったく知らない泳ぎも

丁寧な指導で、とてもわかりやすかった。」

受講生の感想文の多くが「技能」・「知識」・「意識」に関わる記述内容であった。特に「意識」に関する内容が各年度とも共通して最も多い傾向にあった。このことから水泳運動能力の改善に伴う新たな発見、気づき、達成感および充実感を得たことの喜び、さらには水泳授業を通しての体験が運動技能の範疇にとどまらず、広く人格形成にまで影響を及ぼしているといった、正に運動を通しての教育としての課題にまで及んでいることが推測できる。水泳は体育教材の中では運動特性として、克服スポーツとしての位置づけがなされているが、他の運動教材では得にくい成果が水泳では、水という媒介物によって効果的に実現できる可能性を示している。反面、小学校教育から水泳が教材として扱われているにもかかわらず、基礎的水泳運動能力が十分獲得されていない学生が多い状況が本研究対象者の泳力調査および感想文からも予測できる。改めて、小学校から高等学校に至る体育授業における水泳教材の扱われ方に問題が多いことが指摘されるであろう。

#### 4. 要 約

水泳集中授業において測定した泳力と学生による授業評価との関わりから比較検討した結果、次のような結果を導き出すことが出来よう。

- 1) 泳力の優劣に関わりなく、水泳授業に対する評価は高い評価を得ている。特に、「技能」および「指導者」に関わる評価が高い傾向にあった。
- 2) 有意差は認められなかったが、泳力の高い学生ほど水泳集中授業形態の授業に理解が高い傾向がみられた。
- 3) 「健康・体力」に関する評価が他の評価カテゴリーに比較して低く、学生の体力低下状況がかなり反映されていることが推察される。
- 4) レポートの記述内容の分析からは、「意識」に関する内容が特に高く、水泳授業が運動を通しての教育の課題を実践していると言えよう。

#### 参考文献

- 1) 社団法人 全国体育連合：大学体育，第56号：8-13，1995.
- 2) 鋤柄純忠 他：水泳運動能力習得過程の分析 第Ⅱ報（小学校教員志望者に着目して），茨城キリスト教大学紀要（社会・自然科学），31：117-134，1997.
- 3) 大山康彦 他：水泳集中授業における10分間泳の泳距離に関する検討（第二報），茨城キリスト教大学紀要（社会・自然科学），31：135-145，1997.
- 4) 文部省：小学校学習指導要領解説，東山書房，1999.

## Comparative Study of Students' swimming motor ability and Their Evaluation of Syllabus planning in the Intensive swimming class

Yasuhiko Ohyama Sumitada Sukigara Junji Hosogoe

A study was conducted to examine the correlation in students between swimming motor ability and their evaluation of the syllabus planning used for the intensive swimming class.

This study, made from 1997 to 2000, was to measure students' swimming motor ability and their evaluation of syllabus planning in the intensive swimming class.

The measurement for swimming motor ability was made using a 10 minute swimming session, and the measurement for evaluation of syllabus planning was made with a questionnaire for evaluation consisting of 30 items.

The 30 items were composed of 6 categories, namely skill, knowledge, awareness, health, class planning and instructor. The evaluation was a 5 level multiple choice questionnaire taken by 346 students.

The results are summarized as follows:

1. The average of 10 minute swimming distance was 305.18m (1<sup>st</sup> time) and 351.79m (2<sup>nd</sup> time), respectively.
2. There was a highly significant difference between 1<sup>st</sup> time and 2<sup>nd</sup> time for the 10 minute swimming distance, with the average of swimming distance (2<sup>nd</sup> time) being 46.61m farther than the 1<sup>st</sup> time.
3. Regardless of superiority or inferiority in swimming motor ability, many students set a high valuation on all 30 items, especially the 2 items relation to skill and instructor were most highly valued.
4. Students of high swimming motor ability showed a tendency to evaluate the intensive swimming method consistently higher.